

不登校児童生徒のための 中間教室の多様化を模索して

はじめに

不登校児童生徒の増加が全国的な問題となってどのくらい経つのだろうか。校内暴力を含む学校の荒れが問題になっていたのが、荒れが収まるのに合わせるように、児童生徒が家にこもるといふ不登校の問題が表に出てきた。

長野県では、小中学生の不登校問題が様々な場面で取り上げられてきた。全国的にみても、不登校になる児童生徒の割合が高く、対応が求められてきた。県教育委員会は、独自の「不登校への対応の手引き」を作成し、具体的な方策を示してきた。

伊那市でも不登校児童生徒の増加は教育現場の大きな課題の一つとして、各校がその改善に努めてきた。それでもなかなか改善できない中、伊那市教育委員会では、新たな不登校が減少するための取り組みや児童生徒の居場所について、再検討をしてきた。本レポートはその取り組みについてまとめた。

1. 不登校の実態

		平成30年度	令和元年度	令和2年度
小学校	全児童数 (人)	3,647	3,574	3,478
	不登校数 (人)	25	29	28
	割合	0,69%	0,81%	0,81%
中学校	全生徒数 (人)	1,998	1,984	1,923
	不登校数 (人)	56	55	60
	割合	2,80%	2,77%	3,12%

伊那市の不登校児童・生徒数の経年変化をみると全体として増加傾向にあり、小学校・中学校ともに不登校の割合は全国平均とほぼ同じになっている。30日以上欠席した児童・生徒数は平成25年度と令和2年度を比較すると小・中ともに倍になっている。この10年での不登校の増加は顕著であると言わざるを得ない。

2. 新たな不登校を生まないために

□ 伊那市の取組…21校が共通しての取組

本市ではここ数年間、不登校対応の重点を「**新たな不登校児童・生徒を出さない取り組みを!!**」として小中学校全校が次のように取り組んだ。

- ・担任は学級の子どもの登校渋りの兆しを素早く察知して報告する
- ・担任からの報告を受け、直ちにチームで支援を始める
- ・新たな不登校児童・生徒を生まない取り組みに学校全体で取り組む
- ・上記の意識を全職員に持たせる
- ・児童・生徒の最適な居場所を考え、一步を踏み出させる支援を

- ・不登校対策に、入学時から学年（チーム）で早めに取り組み、2年次には不登校を減少させた例もある。このやり方が学校・他学年に伝播して同様な対応ができるようになる。
- ・不登校児童・生徒が多い学校では、不登校対策を、学校課題の大きな柱の一つと捉えられ、学校や学年や職員が連携して不登校対応にあたる。不登校の兆しをいかに早く察知するか、そしてどう支援していくか。「このごろ休みが多くなって心配だなあ、どうしたのかなあ、今日も欠席かあ」と担任が思っている間に、

根は深くなっていく。

- ・学校・学年の連携とは、担任が不登校の兆しを察知したら、すぐに連絡して関係職員で取り組むことで、教頭や学年主任、あるいは係が中心になって担任を支援している学校は新たな不登校児童・生徒が生まれにくい。

□ 一年の中で特に注意をしていく時

- ・5月の連休明け
- ・夏休み明け
- ・運動会の前後
- ・音楽会の前後
- ・文化祭の前後
- ・大きな行事が終わった後
- ・年末年始休みの後
- ・人間関係にもまれた後
- ・自分の力のなさを劣等感として感じた時

以上の時を見逃さず、児童・生徒が困難と立ち向かっている状況を待つのではなく、その都度学校から働きかけを行っていく。

- ・不登校の原因が、家庭に起因するものも少なくない。学校だけでは解決が難しい状況もある。市や県などの外部機関等とも積極的に連携を進めていく。

以上の取り組みで、ことに不登校が増加する時を見逃さず、学校から働きかけていくことが定着してきた。そのことにより例えば、夏休み明けの不登校数が減少。事前に宿題を見てあげたり、宿題の簡易化を図ったり、始業式直前の家庭訪問をしたりと取り組みの成果が出てきた。とはいえ、全体の総数の減少にはなかなかつながっていないのが現状である。

3. 不登校児童生徒の居場所づくりについて

(1) これまでの伊那市中間教室

本市では、「学校での集団生活になじめない」「人との関係づくりに苦しさを感じている」などの理由で登校できない市内外小中学校の児童生徒のために、中間教室（やまびこ学級）を設け、適応指導員が「安心して過ごせる居場所」「そのらしさを大事にした自立支援、学習支援をしていく場所」となるようサポートをしている。

令和2年度の中間教室には小学生3名、中学生12名が通室していた。

本市では令和3年度、前述2と併せて児童生徒を受け入れる中間教室のさらなる機能向上に向け、児童生徒や保護者のニーズに応えられるよう多様化を図ることとした。



これまでの中間教室の内容

◇開設日・開設時間

市内小中学校の登校日に合わせる
原則9時00分～15時00分

◇中間教室（やまびこ学級）の過ごし方

中間教室では「他の人に迷惑をかけない」ことを約束事とし、迷惑をかけなければ自分の好きなことをやっていいことにしている。

学習をする時間が多い児童生徒もいれば、趣味的なことをする時間が多い児童生徒もいて、自分では決められないという子どももいるので、本人や保護者の方と相談しながら取り組みを進められるようにしている。

◇教科学習について

学習については、基本的には「その子のペースで、その子に応じて」と考えており、「自分で学習内容を決め、自分で進めたい」「小学校の○年生の学習からやり直したい」「学習する時間も自分で決めたい」など、願いに添って支援している。学校で使用する問題集をテキストにして学習する機会が多いが、子どもにあったテキストを適応指導員が用意して学習を進めることもある。また、学校で使用しているタブレット端末を使用して学習することもできる。

◇学習以外でやっている主な活動

本や漫画を読んだり、イラストを描いたり、折り紙・切り絵のような工作をしたりしている。小学部は室内外での運動や調理をすることもある。

(2) 令和3年度の取組

①コーディネーターの配置と中間教室の見直し

令和3年度伊那市教育委員会では、不登校対応として

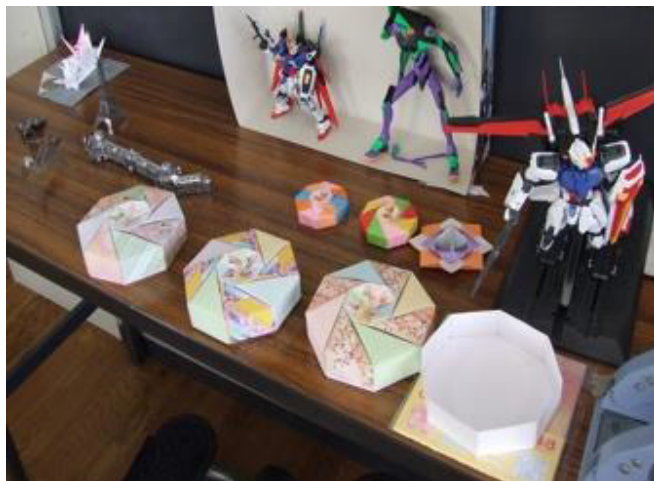
専門のコーディネーターを配置した。その職員は不登校児童生徒や保護者と直接面談をしたり、学校へ出向いて相談や支援をしたり、中間教室で児童生徒に指導をしたりと多様に対応した。その結果不登校児童生徒がそのままの状態で見られる状況が減少した。また、コーディネーターは、現存の中間教室が昼間のみ受け入れ、かつ市内の中心部に1カ所あるだけであることから、原則保護者の送迎が可能な児童生徒に限られ、通室したくても出来ない状況があった事を踏まえ、幅広い活用ができるよう開設時間と開設場所を改めて考え直し、教育委員会に新たな中間教室を提案した。

②夜の中間教室と寺子屋の開設

◇夜の中間教室

家からは中間教室（やまびこ学級）が遠くて自力で通うのが難しい、あるいは夜間の方が活動しやすいという小中学生のために、また仕事を終えた保護者の送迎がしやすい夜間に中間教室を開設することにした。

- ・ 教室開設日毎週月曜日～水曜日
- ・ 教室開設時間 17時30分～20時00分
- ☆どの時間でもOK
- ・ 教室の場所 中間教室（やまびこ学級）
- ・ 支援員を1名配置



◇寺子屋の開設

中間教室（やまびこ学級）の分室として、市内4カ所の公民館等に「寺子屋」を開設した。現存の中間教室（やまびこ学級）は遠くてなかなか通えなかったという小中学生が、家の近くで過ごせる居場所として「寺子屋」を始めた。

- ・ 開設時間は13時00分～16時00分
- ☆どの時間でもOK

- ・ 開設場所 月曜日 西箕輪寺子屋
火曜日 高遠寺子屋
水曜日 手良子屋
木曜日 美篤寺子屋
- ・ 支援員を1名配置

(3) 夜間・寺子屋の開設と中間教室活用の変化

年度	分野	利用者総数	学校復帰
令和2年度	小学部	3人	1人
	中学部	12	1
令和3年度	小学部	9	0
	中学部	22	2
	夜間部	10	0
	寺子屋	11	0

中間教室を幅広く活用できるように改善を進めてきた。送迎や生活基準に合わせた「夜の中間教室」、自宅の近くに居場所を提供する「寺子屋」の開設により、上記の表のとおり自宅に閉じこもっていた児童生徒が動き出すことができた。

◆通室した生徒の感想 2名の生徒

夜の中間教室と寺子屋に通って

私は、学校に行けなくて、家にいましたが、退屈で誰かと話したいと思っていました。そんな時、夜の中間教室が始まると聞いて、すぐに行きたいと思いました。通っているうちに先生が面白くて優しい先生だなと思うようになりました。夜の中間教室にはだんだんと人が来るようになりました。その中で友達ができて話をしたり盛り上がりたりしました。高校進学が近かったので、先生に数学を教えてもらったり進路相談にのってもらったりしました。昼間は寺子屋も始まったので通うようになりました。寺子屋は小学生や中学生が来て話をしたり勉強をしたりと、楽しい思い出が作れました。学校にはあまり行けなかったけれど、夜の中間や寺子屋に行ってみて本当に良かったと思っています。(中3K・K)

夜の中間教室と寺子屋に通って思うこと

家にずっといると退屈だと思つ時がある。僕もその一人で2年近くずっと家でだらだらと過ごしていた。そんなある日、ソーシャルワーカーさんが訪ねてきて「中間教

室」の話をしてくれた。話を聞いているうちに面白そうだなと思い、行ってみようと思った。僕は夜の間教室に行きました。先生は一人一人と向き合って元気で明るい人だと思っていた。でも仲良くなるにつれてそれだけじゃなくしっかりした考えをもって尊敬できる人だと思えるようになりました。数ヶ月したころから地元の寺子屋にも行くようになりました。寺子屋では3人が通ってきていて、一人は礼儀正しくて、もう一人は元気が良すぎて、僕も同年代の人と会話をするので、緊張はあったものの、数回でうちとけて居心地のいい空間でした。中間教室に来ている人たちとすごく喋ったわけではないけれど、お互いの個性を理解してあげられる人が多くて、話していて気持ちが楽になるところでした。長続きのしない僕が卒業するまで続けられたので一度は行ってみる価値が100パーセントと断言していいほどあるので、学校へ行かない人は中間教室に行って、今の自分にとって大切なものが見つければいいと思います。(中3 N・S)

(4) 個に合わせたふれあい活動

中間教室を利用する児童生徒には人とのかかわりを嫌がる子が多い。したがって窓際を向いて一人の空間内で過ごしている児童生徒が多い。なかには個室を希望する児童生徒もいる。夜間中間教室や寺子屋では、「かかわり」という課題を持つ子らにあえて個に合わせたふれあい活動を進めてきた。

その中で焼き肉会と出発式を紹介する。

◇焼き肉会

7月の最終週に夜間中間に通室してきた生徒たちが玄関前に炭をおこし焼き肉会を実施した。なかには、鶏肉しか食べられないからと家から鶏肉を持参した生徒もいた。火を囲んで自然と会話が出来、なかなか話せなかった仲間と交流ができた。そのあとの花火は盛り上がったの交流となった。

◇出発式

不登校を経て中学を卒業した3年生の心新たな門出を周りの大人や仲間が祝い励まして送り出すことで、3年生が勇気をもって新たな一歩を踏み出せることを願って3月の末に「出発式」を実施した。生徒たちとカレーを作り、式のあとは保護者と一緒に食事をした。大人数の中でともに時間を過ごし、4月からの新たな出発の準備となった。

◆出発式を終えた後の新聞の記事より

令和4年3月31日信濃毎日新聞

あなたは自力で起き上がり、これまでの自分に立ち向かい、そして見事に一歩を踏み出しました。

不登校の児童生徒の居場所として伊那市教育委員会が昨年5月から開いた「夜の中間教室」。在籍校が遠く市内の中学3年生6人が22日夜、新たな門出を祝う「出発式」で「出発証書」を受け取った。桜子さん(15)は「仮名」は「高校生」の待ち遠しさを感じ、離れたくない気持ちが半々」と、充実感を

キラキラ

再び一歩 踏み出せた春

中学1年の3学期、マイコプラズマ肺炎による入院に新型コロナウイルス流行による臨時休校が重なり、3カ月ほど学校を休んだ。久しぶりに登校すると「緊張して話せなくなった」。マスクの下に隠れた級友の表情も分からない。不安は恐怖へと変わって心身のバランスを崩した。

自宅から出られなかった3年の5月。担任が持参した夜間の中間教室の案内に自分の「居場所」を求めた。「学校は無理に行かなくてもいい。勉強もやりたい時でいい」。指導員の北沢喜宏さん(64)の言葉に肩の荷が下りた。

範囲を決めて集中して勉強し、残った時間は卓球をしたり絵を描いたり。少人数の環境や好きに時間を過ごせるのが合い、ほぼ休まずに通った。自分を表現したいという気持ちが芽生え、北沢さんに歌を披露することもあった。

居場所や社会との向き合い方を模索した3年間。出発式の後、「級友」と調理したカレーを保護者も一緒に味わい、マスクの下に隠れていた笑顔をのぞかせた。4月からは全日制高校に通う。「演劇や美術を頑張る」と前を向き、北沢さんに見送られて「母校」を後にした。

(朋)

(5) 新たな寺子屋の設置をめざして

昨年度の改善の上に令和4年度は、一日寺子屋の開設を図ったり、子どもたちの希望にそった幅の広い活動を取り入れたいと考えている。

◇一日寺子屋(伊宝館)の概要

家に閉じこもっている児童生徒に働きかけ、週に1日だけ学校ではない寺子屋に来て、自分で決めた日課で過ごす。

- ・寺子屋の場所 使用していない教員住宅を活用(備品類は活用しない市の備品を借用する)
- ・時間 毎週木曜日 9:00～16:00
- ・昼食 自分たちで作って食べる
- ・特色のある活動 食べるものは自分で作ることを大切

にした畑づくり。水泳（体力の向上を目指して近くのスイミング施設を利用させていただく）

- ・インターネット関係設置
- ・支援員 1名配置
- ・開設日 9月1日～

◇幅の広い活動を取り入れていく

中間教室に通室してきた児童生徒たちにやってほしいことややりたいことはなにかと問うと、学校で行われている行事をしたいと言う。一方で不登校故に将来のことを深く考えている児童生徒も多く、キャリアについて学びたいと思っている。そこで、本年度は、中間教室の様々な場で、児童生徒が希望する活動を関係団体と協力・連携しながら実施していきたいと考えている。

具体例として 木工教室、粘土・焼き物、華道・茶道、音楽・ギター、演劇、ネットアニメ、農業体験、工場見学、仕事調べ、農家の手伝い、川遊び、焼き肉、花火大会、焼き芋、ハロウィン、餅つき、クリスマス会、そば打ち、卒業式パン作り、親子カレー会、親子焚火の会、五平餅の会 等

おわりに

本市の不登校児童生徒数は相変わらず多い。そういう児童生徒に、今までは何とかして学校復帰を促そうとしてきた。それはそれで大事なことであり、これからも学校復帰に向けた支援を続けていく。一方で、担当者は不登校の児童生徒に接することで、児童生徒が学校ではない居場所を見つけて、そこで学んだりコミュニケーションを図ったりすることも積極的に認め支援していくことが大切になっているとの思いを強めている。伊那市では今後も児童生徒の居場所づくりを民間団体とも協力連携しながら開拓していきたいと考えている。